

1992年12月13日午前5時30分、「ドゥカーン」スタートの大砲一発、そして次々と打ち上げられる花火、夜明け前の夜空に咲く花を見ながらランナーの行列が静かに動き出した。参加者3万人のうち、日本人は3分の2と言われる第20回目の大会はスタートした。

全ランナーのほぼ中間くらいの混雑の位置からスタートした私は、本当のスタートラインの所につくまで7分を要している。恐らく最後尾は10分はかかるだろうと言われている。横に30人くらい並走できる道幅を大きな人流れがようやく動き出した。

不安と期待とわくわくする気持ちでゆっくりペースで走りだした。10km以上のジョギング経験のない私、果たして完走できるだろうか。第一目標のアロハタワーは

見失ってしまった。5km毎の給水ポイントでは必ず水を取ろうと、心に決めて走る。私たちのホテル、ワイキキビーチホテル前を通過した所で約12km、じつとりと汗ばんできた。まだ夜は明けない。やがて先方に、登り坂が見えてきた。ダイヤモンドヘッドのそばである。坂を登りきったところ、ようやく太陽が姿を現わしてきた。海辺に浮かぶ太陽はとてもすばらしい。登り坂も今までのペースで走りきれ。今までに1000人以上のランナーを追い越してしまっただろう。小山

「65歳の挑戦」

ホノルルマラソン完走記

のようなアメリカ人、小さな日本人、そして女性ランナーなど――。

22km地点、やっと疲れがでてきた。目標はツアーピクチ

ヤーポイント24・5km地点である。ポイントで写真に収まり、バナナを一本もらい、ほっとしながら走る。1マイル毎、10km毎の表示が気になる。やがて折り返し地点を過ぎた18マイル地点(約29km)往路のランナーが続々と走ってくる。何千人と言う数だ。「ああ、俺はこの人たちよりかなり前を走っているんだなあ」と優越感を覚える。

遂に30km地点3時間28分59秒である。まずは快調なペースを維持できた。これから勝負だ。経験距離の3倍は来た。32km、もう足が上がらない、ももが猛烈に痛い、すでに汗はかかなくなっている。10分歩いて15分走ることになった。さあ10分歩いた、つぎは走る番だ。しかし走れない。すでにランナーの80%は歩いている。歩く帯びである。

歩いたり、走ったり、「あと3km」の声も他人ごとのようで、気分が悪くなってきた。しかし、ほんの一寸で治った。少し走って見よう。やはり走れない。歩く。

少し下り坂になって、あと2kmくらいか、依然と足が痛

い。あと1km地点、痛みをこらえて走る気を起こした。ゆっくり、周りも最後の気力とばかり、走る人がではじめた。走ることは歩くことより早い。前のランナーを次々と追い越せる。風雨線のアーチが見えてまだ、500mくらいか。何とか走れそう。だが、ゴール地点はそのむこうのフィニッシュアーチだ。1000mはありそう。何と長いことか、カンパレももう少しだ。そして

遂にゴール。5時間32分40秒。首輪をかけてもらい、氷入りのコーラがなんとうまいことか。やっと生きた心地がしてきた。完走シャツとメダルをもらい、ツアーテントで軽食をとり、足を引きながらホテルに帰還。ついにやった。なんだか鼻が高いようだ。苦しかったが楽しい42・195キロメートルであった。

【北清水 鈴木 和】



現地(ハワイ)で記念撮影(右はしが鈴木さん)